九、海雲寺の荒神堂

　京浜急行電鉄の青物横丁の駅の近くにある海雲寺（南品川三丁目五番二十一号）は、神奈川県鎌倉市にある建長寺を開いた、大覚禅師の弟子の不山東用という人が、庵を建てて、祈りの日々を送ったのが始まりと伝えられています。

　不山は、のどかでゆったりとした漁師町の南品川や鮫洲辺りの風景や人びとをたいへん好んだそうです。そして、潮の満ち干きの音が聞こえるこの海辺に、建長三年（一二五一）に、粗末な庵を建て、この庵を瑞林案と名づけ、海晏寺（南品川五丁目十六番二十二号）に連なる小寺としました。

　その後、文禄二年（一五九三）海晏寺が、臨済宗から曹洞宗に、宗派が変わった時に、海晏寺の五世だった分外祖耕和尚が、独立した一寺としました。このことから海雲寺は、開基を寺の墓を作った不山東用とし、開山を寺を開き教えを広めた分外祖耕と伝えられています。

海雲寺の本尊は、十一面観音で仏師の春日が、制作したと伝えられています。また、この寺には、本尊の他に、三宝荒神像を祀った、荒神堂があります。荒神像が、この寺に祀られるようになったいわれについて、次のような話が伝えられています。

寛永十四年（一六三七）に始まった肥後の国天草（熊本県天草市）の乱に、江戸幕府の命によって出陣した佐賀藩主鍋島勝茂の子の直澄は、天草に着いた時、この地の荒神ケ原にあった荒神社に戦勝の祈願をして、戦場に向かったそうです。

　戦場では、直澄が江戸に出る時に、直澄に手柄があれば自分は死んでもいいと、祈ってくれた乳母が、戦いの間いつも直澄の馬の前に現れて、敵の矢を次つぎと払いのけてくれたので、直澄は、大きな手柄をたてることができました。

　江戸に帰った直澄は、すばらしいご利益のあった荒神様を、自分の屋敷（港区芝二本榎）に祠を作って祀りましたが、その後、しばらくして、縁のあったこの海雲寺に移しました。

　荒神様が、海雲寺に移されてからも、この神様のご利益は多く現れたそうです。この当時の江戸は、火事がとても多く、品川宿も度たび大火にみまわれました。ところが、燃え移ってきた火が、海雲寺の近くまで来ると消えてしまったり、海雲寺の近くを避けて燃え移ったりすることが、よくあったのだそうです。そのようなことが続いて、もともとは火の神だった荒神様が、いつしか火難よけの神として、多くの人に知られるようになりました。

　この神様の正しい名前は、千躰三宝荒神王といわれる神様で、いろいろな悪を罰するために、大変恐ろしい怒りの顔をしています。またこの神様は、三宝（仏・法・僧）を守る守護神で、不浄を嫌い、火の清浄を愛するので、家々のカマドを住むところにしました。そこで、火事の多かった江戸の町では、カマドの神として、さかんに祀られるようになりました。

　三月と十一月の二十七・二十八日の荒神様の縁日には、いつもは静かなこの辺りも、江戸の各地から集まる人々でにぎわい、この日の朝は、早くからお祭りを急ぐ大勢の人々の足音で、付近の人々の眠りをさますほどだったと言われています。寺の門前にはたくさんの屋台がならび、品川名産の海苔やお釜の形をした菓子のおこしなどが売られ、地元の商人たちにもご利益がありました。

　また、この縁日のころになると、毎年強い風が吹き荒れ、「荒神風」といわれました。顔も体も、怒りを現す荒神の姿と、ビュー・ビューと吹き荒れる風によって、荒神様のご利益は、信者の心に、いっそう強く残されたのです。

海雲寺千躰荒神祭

撮影日2002年(平成14年)11月28日

「しながわweb写真館」より

